

# 青葉の下

小川未明

青空文庫



とうげうえ、おおお、大きな桜の木がありました。春になると花がさいて、峠の上に、とおくから見るとかすみのかかったようです。その下に、小さなかけ茶屋があつて、人のいいおばあさんが、ひとり店先にすわつて、わらじや、お菓子や、みかんなどを売っていました。

荷を負つて、峠を越す村人は、よくこのこしかけに休んで、お茶をのんだりたばこをすつたりしていました。

賢吉と、とし子と、正二は、いきをせいて、学校からかえりに坂を登つてくると

「おばあさん、水を一ぱいおくれ。」といつて、飛びこむのでした。

「おお、あつかつたろう。さあ、いまくんできたばかりだから、たんとおむがいい。」と、おばあさんは、コップを出してくれました。おばあさんは、峠の下から、二つのおけに清水をくんで、天びんぼうでかついで上げたところでした。

ところが、自動車じどうしゃが、こんどあちらの村むらまで通とおることになつて、道みちがひろがるのでありました。それで、桜さくらの木きをきろうという話はなしが起おこつたのです。それに、ほんたいたしたのは、もとよりおばあさんでした。つきには、この茶屋ちややに休やすんで、花はなをながめたり、涼すずんだりした村むらの人ひとたちです。それから、賢けん吉きちや、とし子こや、正しょうじ二になどの子供こどもたちでした。

「あの桜さくらの木きをきつては、かわいそうだ。春はるになつても、花はなが見み

られないし、夏なつになつても、せみがとれないものなあー！」と、たがいに話し合あいました。子供こどもたちの不平ふへいが耳みみに入はいると、親おやたちも、いつかきることに、はんたいしました。それで村むらの人々ひとびとが桜さくらの木きを道みちのそばへうつすことになつたのです。おおぜいちからの力ですると、どんなことでもされるものです。大きな桜さくらの木きは、じやまにならぬところへうつされて、おばあさんの茶店ちやみせは、やはりその木きの下したにたてられました。

「おばあさん、今年ことしは、花はながさかないのう。」

「そうとも、人間にんげんでいえば、大病だいびょうにん人だぞ。かれなければいいが。」と、おばあさんは、しんぱいしました。天気てんきがつづくとおばあさんは、下したから水みずをくみ上げて、根ねもとへかけてやりまし

た。

「おばあさん、僕ぼくがくんできてやるから。」

ある日ひ、学校がっこうの帰りかえに賢吉けんきちは、すぐはだしになつて、バケ

ツを下さげて、峠とうげをかけ下くだりました。それから、とし子こも、正しょうじ二

も、村むらの子供こどもたちは、学校がっこうの帰りかえに、水みずをくんで、桜さくらの木の根ね

にかけてやるのを日課にっかとしたのです。どうでしょう。木きは、ふた

たび昔むかしの元氣げんきをとりもしました。いま、大おおきな枝えだには青葉あおばがふ

さふさとして、銀色ぎんいろにかがやいています。

「みんなのおかげでな、この木きも助たすかったぞ。」と、おばあさん

は、こしかけている村むらの子供こどもたちの顔かおをながめて、さも、うれし

そうでありました。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「せうがく三年生」

1938（昭和13）年5月

※表題は底本では、「青葉《あおば》の下《した》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 青葉の下

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>